

情痴 アヴァンチュール

2007(平成19)年4月28日鑑賞(ユウラク座)

★★



監督=グザヴィエ・ジャンリ/出演=リュディヴィーヌ・サニエ/ニコラ・デュヴォシエル/ブリュノ・トデスクーニ/フロランス・ロワレ=カユ (東芝エンタテインメント配給/2005年フランス、ベルギー映画/107分)

……「妖艶な肉体をもつ小悪魔」リュディヴィーヌ・サニエを楽しみに観に行ったが、いささか期待はずれ……？ 「情痴」以上に「アヴァンチュール」がメインだが、夢遊病者のヒロインに絡む2人の男の役割がイマイチ不明……？ また、単なる夢遊病者による迷惑物語なのか、それとも心神喪失者による犯罪の本質論をついた映画なのか、弁護士の私ですらイマイチよくわからない……？ フランス映画は凝りすぎて難解なものが多い……？ そう確認せざるをえないような展開と結末に少しうんざり……？

カンヌ国際映画祭短編部門パルムドール受賞監督作品だが……

フランス映画は昔から難解なものが多い。この映画の監督・脚本は、1998年のカンヌ国際映画祭短編部門でパルムドールを受賞したグザヴィエ・ジャンリ監督だが、あまりにもヒネリすぎていて私にはサッパリわからない……？

チラシや新聞宣伝は、下着姿のリュディヴィーヌ・サニエの煽情的な姿を強調して興味を引こうとしているが、彼女が演じるヒロインのガブリエルは、なんと夜の街を徘徊する夢遊病の女。そしてこの女に翻弄されるのが、ジュリアン(ニコラ・デュヴォシエル)とルイ(ブリュノ・トデスクーニ)という2人の男。

サブタイトルに「アヴァンチュール」とつけているように、こんな夢遊病の女に関わり合うことになれば、ややこしい事件に巻き込まれ、本来しなくてもいいアヴァンチュールを体験することは避けられないもの……？ だから、ホントはこんな女と関わり合いになりたくない、しかしどうしてもその女の魅力に引きず

り込まれてしまう……。そんなアブない世界を描くのが、フランス映画は得意。そして、『スイミング・プール』（03年）等で有名なリュディヴィーヌ・サニエは「妖艶な肉体を持つ小悪魔」というイメージの女優とのことだから、まさに適役……。しかして、その映画の出来は……？

部屋選びの決定権は女性側に……

この映画の冒頭は、女性の声によるナレーションから。それは恋人ジュリアンとの同棲を決めた女性セシル（フロランス・ロワレ＝カイユ）が、ジュリアンと一緒にアパートの部屋の下見に訪れるシーンから。

案内している不動産屋は、この2人がどんな人種でどんな関係かを調べるべく、婉曲ながらいくつかの必要不可欠な質問を……。それをジュリアンは不機嫌そうな顔をしながら聞いているが、どうも部屋選びの決定権は明らかにセシルにあったよう……。したがって、その後発生した危険な隣人ガブリエルとの間で発生したアヴァンチュールの責任の大半は、ガブリエルに対してスケベ心を抱いたジュリアンにあるものの、この部屋を選んだ点でセシルにも多少の責任が……？

こんな隣人は困ったもの……？

ジュリアンの仕事はモニターばかり見ているビデオ・ライブラリーの仕事で、昼と夜が逆転するもの。そして無機質で、人と接触することが極端に少ない仕事。両親は「そんな仕事は嫌でしょう」と同情してくれているが、ジュリアンは全然そんなことはなく、結構気に入ってる様子。

そんなジュリアンがある夜、アパートへ帰ってきたとき（出掛けようとしたとき？）に発見したのが、裸足で街の中を徘徊している女性ガブリエル。目だけが異様に光っているから誰が見てもかなり異様な雰囲気だが、それがまた、男から見れば結構魅力的……。そこで思わず、「どうしたの……？ 大丈夫……？」と声をかけたのが、運の尽き……？

そして、こんなケツタイな女性が住んでいたのが、実はすぐ向いにあるアパートの1室。なぜそれがわかったかという、それはある時心配のあまり（？）、ジュリアンが彼女の後をつけて部屋の中まで入っていったから。なぜそんなこと

ができたのか、などという枝葉末節のこと(?)は横に置き、その立派な部屋の中で1人寝ていたガブリエルの姿は……?

いくら魅力的な美女とはいえ、やはりこんな変な隣人は困ったもの……? まして、ある日突然ガブリエルがジュリアンの部屋を訪れてきたことによって、そんなヘンな隣人とジュリアンが「つき合っている」ことを知らされたセシルは……?

夢遊病者ってホントに怖い……

世の中に夢遊病という病気があり、夢遊病者がいることは誰でもよく知っているはず。そして、その病状には認知症と一部共通するものが……? なぜなら、無意識の中で勝手な行動をとるのは同じだから……?

この映画の中では、何回かガブリエルの治療風景が映し出され、ドクターによる症状の解説と治療方法が語られるが、それを見たり聞いたりしていると、夢遊病ってホントに怖いことがよくわかる。

夜の街の徘徊や自傷行為にも困ったものだが、それは自分で危険を背負いこむものだからまだマシ。しかし、無意識のうちに他人に対して危害を加えるようなことになれば……? これって、刑法的にはモロに心神喪失者による行為になるから、その夢遊病者は無罪になってしまうのだが……?

もう1人の男は……?

この映画にはジュリアンの他、もう1人年上の男ルイが登場する。ルイはガブリエルの部屋で同居しているらしいが、ガブリエルの話によると、ルイは結婚しており、子供もいるらしい。しかもガブリエルのご招待によって、ジュリアンとセシルがガブリエルとルイの部屋を訪れて話をしていると、ルイはお金を動かす仕事をしているらしい。しかし、その実態はイマイチ不明……?

要するに、グザヴィエ・ジャノリ監督が意識してそのように味付けしている映画らしく、何もかもが謎めいていて、観客にはよくわからない……?

そんな家族パーティー(?)の席で見せるガブリエルの応対ぶりもきわめてエキセントリックだから、その人格がいつ壊れるかと心配になるのは当然。こりゃ、先が思いやられそう……?

お色気度 vs. サスペンス度……？

私は、この映画の『情痴』というメインタイトルとガブリエルの悩ましい姿態から、これはお色気満点の映画だと思っていたが、実際にはそれはチラリチラリで全く期待はずれ……？

それに対し、サブタイトルの『アヴァンチュール』はサスペンス性を示唆するものだが、この映画では、ストーリーが進展するにつれてそのサスペンス性がジワリジワリと効いてくる。サスペンス性を高めるためには、不安、不信、疑惑、裏切り等の要素をストーリーの中に入れこめばいいわけだが、ガブリエルの登場によってジュリアンとセシルの間にそんな要素が急速に広がると共に、ジュリアンとルイとの間でもガブリエルの奪い合い的な要素が……？

こんな夢遊病の女に関わっていればロクなことはない、と観客の私たちにはすぐにわかるのだが、肝心のジュリアンとルイはやはりガブリエルの小悪魔的な魅力に惹かれているらしい。そしてそれは、セシルにとって最も腹の立つこと……？ したがって、ガブリエルの奇妙な行動を軸として、この映画のサスペンス性だけが次第に高まっていくことに……。

しかして、遂にクライマックスの局面においては、ある事件が……？ そしてその結末は……？

さて、あなたはこんな映画って好き、それとも……？

キネ旬の評価は？

この『情痴』については、キネマ旬報4月上旬号の「REVIEW 2007 Part 2」で4人の映画評論家によるコメントと採点が載っている。それによると、1点が2人、2点が2人、計6点と非常に低い採点となっているうえ、どのコメントも私の感じたこととほぼ共通するものばかり……。

グザヴィエ・ジャノリ監督は、チラシや新聞宣伝におけるちょっとヒネった誘惑的なほめ言葉よりも、こういう映画評論家の率直な意見にきちんと耳を傾けた方がいいのでは……？

2007(平成19)年5月1日記